

JET からの手紙

かつて迷子だった ALT の不思議な事件たち

東京都立千早高等学校 外国語指導助手

Marge Joseph Sardo (マージ ジョセフ・サード)

私は高校生のとき、探偵映画が大好きでした。1995年の探偵ドラマ『金田一少年の事件簿』を観て、主人公の謎解きにとっても感動したのを覚えています。事実、このドラマがきっかけで日本への興味がさらに深まりました。数年後、私は JET プログラム（語学指導などを行う外国青年招致事業）に参加し、東京都立千早高校に 外国語指導助手（ALT）として赴任しました。

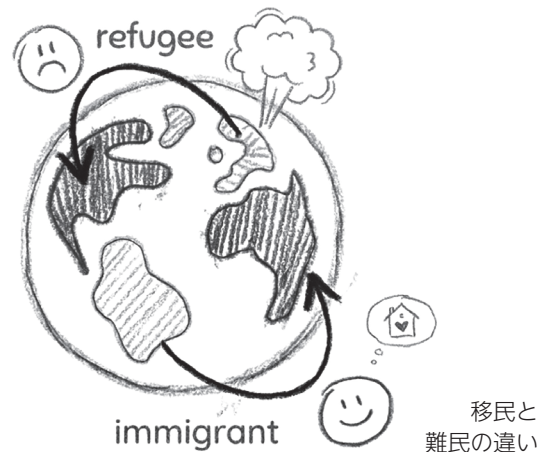
フィリピンで理科教師をしていた私は、英語の授業や日本で自分がどんな役割を果たせるのかが分からず、不安でした。それはまるで謎のようでした。赴任後、ドラマの主人公のように、私は毎日の経験（事件現場ではなく！）の中で手がかりを探し始めました。ここでは、私が ALT として果たせる役割を発見する助けになった“探偵事件”をご紹介します。

声なき意味

最初の事件は教室内で起こりました。ある日、日本人英語教師が「immigrant（移民）」と「refugee（難民）」の違いを説明してほしいと言いました。長い説明の代わりに、私はチョークを手に取り、黒板に絵を描きました。地球を描き、大陸間を移動する笑顔の矢印、そして爆弾が落ちる中を悲しい顔で移動する矢印を描いたのです。すると生徒たちはうなずきながら「なるほど」とつぶやきました。言葉を一言も発さなくても、彼らは自分で意味を理解できたのです。

事件は解決！

私は ALT の役割が「英語をたくさん話すこと」だけでなく「英語を理解しやすくすること」でもあると気づきました。シンプルな絵を使うことで、生徒たちは自然に意味をつかむことができたのです。言語は“話す”



だけでなく、“見て理解する”ものでもあると実感しました。

街をさまよう者

次の事件は、東京で行きたい場所を探していたときに起こりました。オンラインでボランティアの募集を見つけ、渋谷の代々木公園で日本の子どもたちと遊び、簡単な英単語を教えました。私が担当したのは果物で、フィリピンでも有名な「バナナ」を選びました。この簡単な



代々木公園のボランティア

レッスンは子どもたちにとって忘れられないものになりました。

その後、別の手がかりが埼玉県川越市へと私を導きました。地元のボランティアガイドの人々が私を招き、研修の一環としてフィリピン文化を紹介してほしいと依頼をしてくれたのです。私は、日本の団子がフィリピンの carioca（揚げた串に刺した米粉団子）に似ていることを紹介しました。そのお返しに、彼らは町を案内し、川越市の歴史や地元の食べ物（私は特にサツマイモが大好きです！）を紹介してくれました。

これらの経験から、教室の外での人間のつながりを通じ「文化の共有者・学び手」としてフィリピンと日本を結ぶ、という役割を見出すことができました。



埼玉県川越市での文化紹介

最後の欠けたピース

最後の事件は、それまでの経験のすべてを結びつけてくれました。私は 全国語学教育学会（JALT）のイベントに参加し、ALT としての経験を発表しました。ここでは、最初の事件から得た気づきをもとに、絵を使って定義を説明する指導法を紹介しました。



エキスポ

その後、東京都教育委員会から、「都立高校 EXPO」のデモ授業を担当してほしいという依頼が届きました。私は、フィリピン料理のアドボなどが入った「魔法のお弁当」を食べると世界を救う力を得る—そんな物語仕立ての英語の授業を行いました。

その瞬間、私の謎はすべて解決しました。

私の ALT としての役割は、言語、文化、学びを結びつける“懸け橋”になることだと気づいたのです。

振り返ると、私の ALT としての旅は日本の金継ぎを思わせるものでした。迷いや学び、共有した文化の理解は消えてしまうのではなく、むしろ一つに結びつき、教室や地域、そして日本に貢献するための大切な役割を形づくってくれました。これは「懸け橋をつくり、相互理解を深める」という JET プログラムの精神そのものです。これからも、英語学習と文化理解を結びつける授業や方法を探究し続けたいと思っています。

金田一のように、最初からすべての答えを持っていたわけではありません。でも、手がかりを辿ることで、ようやく自分の居場所を見つけることができました。



全国語学教育学会（JALT）のイベント

プロフィール



Marge Joseph Sardo (マージジョセフ・サード)

フィリピンのカヴィテ州カルモナ出身。日本の探偵映画が好き。教育学部で生物科学を専攻。数年間理科を教えた後、フィリピンの文化の美しさを伝えたいという情熱から JET プログラムの参加を決めた。フィリピンと日本の文化をつなぐ物語を語り、互いの理解を深めることに喜びを感じている。